京都大学新聞
学生出版
京都大学新聞社
京都市左京区吉田
京都大学内
京都(081)(75)(2)(代)42番
振替・京都3909
(1部10円)

停年退官教授の横顔(2)

▽有機化学 明治三十五年京都生まれ。大正十四年京大理学部化学科卒業。昭和三十五年から現在に至る。京大アクリル高分子研究所のコンパクト・ダンプ工場の開発に成功。また武蔵野工業大学の顧問として、また、日本学術会議会員(第四期)の委員として活躍。

▽有機合成化学 明治三十四年生まれ。昭和三十年から現在に至る。京大アクリル高分子研究所のコンパクト・ダンプ工場の開発に成功。また武蔵野工業大学の顧問として、また、日本学術会議会員(第四期)の委員として活躍。

▽有機

切実な死への連帯感

―鮎川信夫における生の孤立と断絶

都市の影像と神の影像と

十全に死なゝ
とは不可能

詩「荒廃」のなかのよく知られている最後の一節に、

「人間の死は、ただ、ひとりの死にすぎない。」

という言葉がある。

この言葉は、「荒廃」を書いたエリオットが、「荒廃」のなかで、ダンテ、ボードレール、ランボオ、ジャン・コクトーなどの名前を挙げ、「彼らは、みんな、ここに居る。」と言っているように、ヨーロッパ文学の伝統を継承し、ダンテ、ボードレールなどの、ヨーロッパ文学の伝統を継承した人々の名前を挙げ、「彼らは、みんな、ここに居る。」と言っているように